平城宮跡第119次発掘調査現地説明会資料　昭和54年8月25日

奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部

平城宮跡発掘調査部では、推定「第1次朝堂院」地区の発掘調査を継続的に行なっており、漸次その様相が明らかになってきている。今回の第119次調査は、この第1次朝堂院の南を限る門の検出を目的として実施したものである。調査は昭和54年7月2日に開始し、現在継続中である。発掘面積は約2000㎡である。なお、第77次調査で第1次朝堂院の北を限る門と築地回廊とを検出している。また、第16・17次調査で朱雀門とその北方約130ｍについて調査を行い、その範囲内には第1次朝堂院の南を限る門などの施設は存在しないことが判っている。

1　地形および遺構の概要

発掘区周辺の平城宮造営以前の地形は、北から南へ緩く傾斜する谷筋にあたっており、旧地表は均質なシルト又はやや粗い砂の堆積した層である。この上に灰褐粘土で整地を行い、宮を造営している。検出した主な遺構は、建物2、塀2、溝11、礫敷きの路面などである。これらの遺構は次の3時期に大別できる。

平城宮造営以前　南北溝ＳＤ02・03の下で検出される2本の南北溝ＳＤ1860・1900は下ツ道の東西側溝で、両溝心々間距離は約22ｍである。

Ａ期　この時期の遺構としてはＳＢ10（推定第1次朝堂院南門）と、ＳＢ10にとりつく掘立柱塀ＳＡ08・09及びＳＢ10の北に広がる拳大の礫を敷いた路面ＳＦ12がある。ＳＢ10は後の削平によって基壇は全く残っていないが、門基壇造成に先立って行われた掘込み地業の範囲を確認することができた。検出した掘込み地業の規模は東西約26.5ｍ（90尺）、南北約16.2ｍ（55尺）である。基壇内側には拳大よりやや大きい礫を入れた赤褐色砂質土を置き地業を行なっている。なお、3ケ所に礎石の落し込み穴があり、その中の一つには直径約70㎝の円形造出しと地覆座を持つ礎石が落し込まれていた。ＳＡ08・09は9尺等間で、ＳＡ08は5間以上、ＳＡ09は4間分検出した。ＳＡ08の各柱掘形は溝状に繋がっている。ＳＦ12は門の北側の通路で、全面に礫を敷いている。

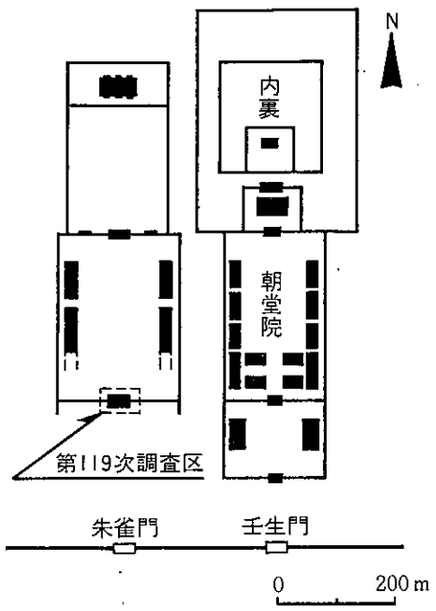
Ｂ期　ＳＢ10の廃絶後の時期である。この時期の遺構としては、溝ＳＤ01・02・03・04・05・06・07、建物ＳＢ13とＳＸ11があり、ＳＦ12はなお存続している。この時期は3小期に区分できる。先ずＳＢ10の廃絶直後にＳＤ01・02・03・06Ａ・07Ａの溝が掘られる。ＳＤ01・02・03によって北と東西を限り、赤褐色砂質土の分布を南限とする東西約23ｍ、南北約12.5ｍの範囲に門ＳＢ13が建てられる。次にＳＤ06Ａ・07Ａを埋めて、ＳＤ06Ｂ・07Ｂが掘られる。この時期にはＳＤ02・03に挟まれたＳＦ12の東西に径数㎝の砂利を敷いている。その後ＳＤ01・02・03・06Ｂ・07Ｂは埋められ、ＳＤ04・05が掘られる。なお、ＳＤ06・07は掘立柱塀ＳＡ08・09の後に築造されたと推測される築地の雨落ち溝と考えられる。築地は後世の削平により残存していない。また、ＳＸ11はＳＢ10の廃絶後、ＳＢ13が建てられるまでの間の仮設的な閉塞施設の一種ではないかと考えられる。

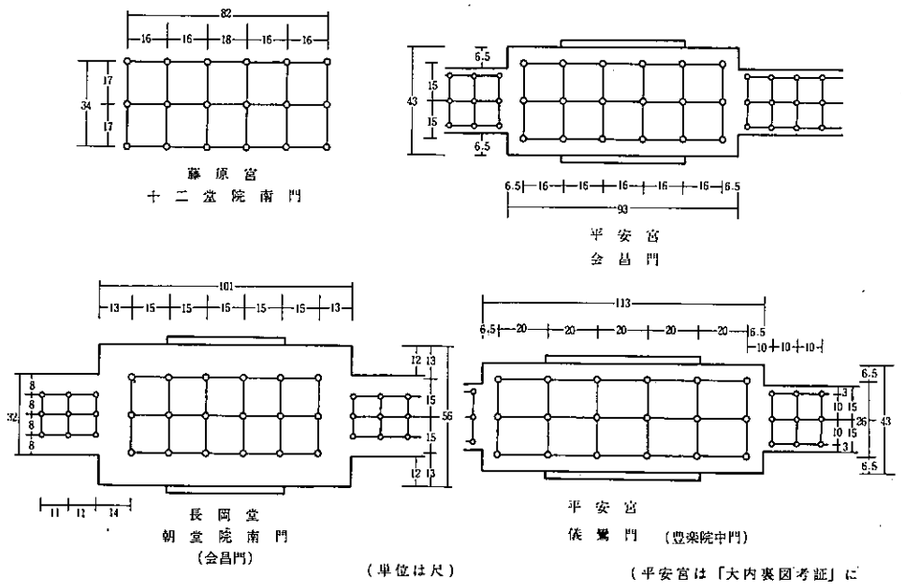
2　出土遺物

土器の出土量は極めて少ないが、ＳＡ09の柱抜取痕跡から天平初年頃の土師器片、ＳＤ07Ａの埋土から天平宝字頃の須恵器片が出土した。瓦類の出土は多く、軒瓦は総数200点近くが出土している。また鬼瓦片や磚もあわせて出土した。軒瓦は大半が藤原宮式と平城宮Ⅰ期（和銅～養老）のものであるが、ＳＤ01の埋土には平城宮Ⅲ期（天平末～天平勝宝年間）のものが2点含まれていた。

3　まとめ

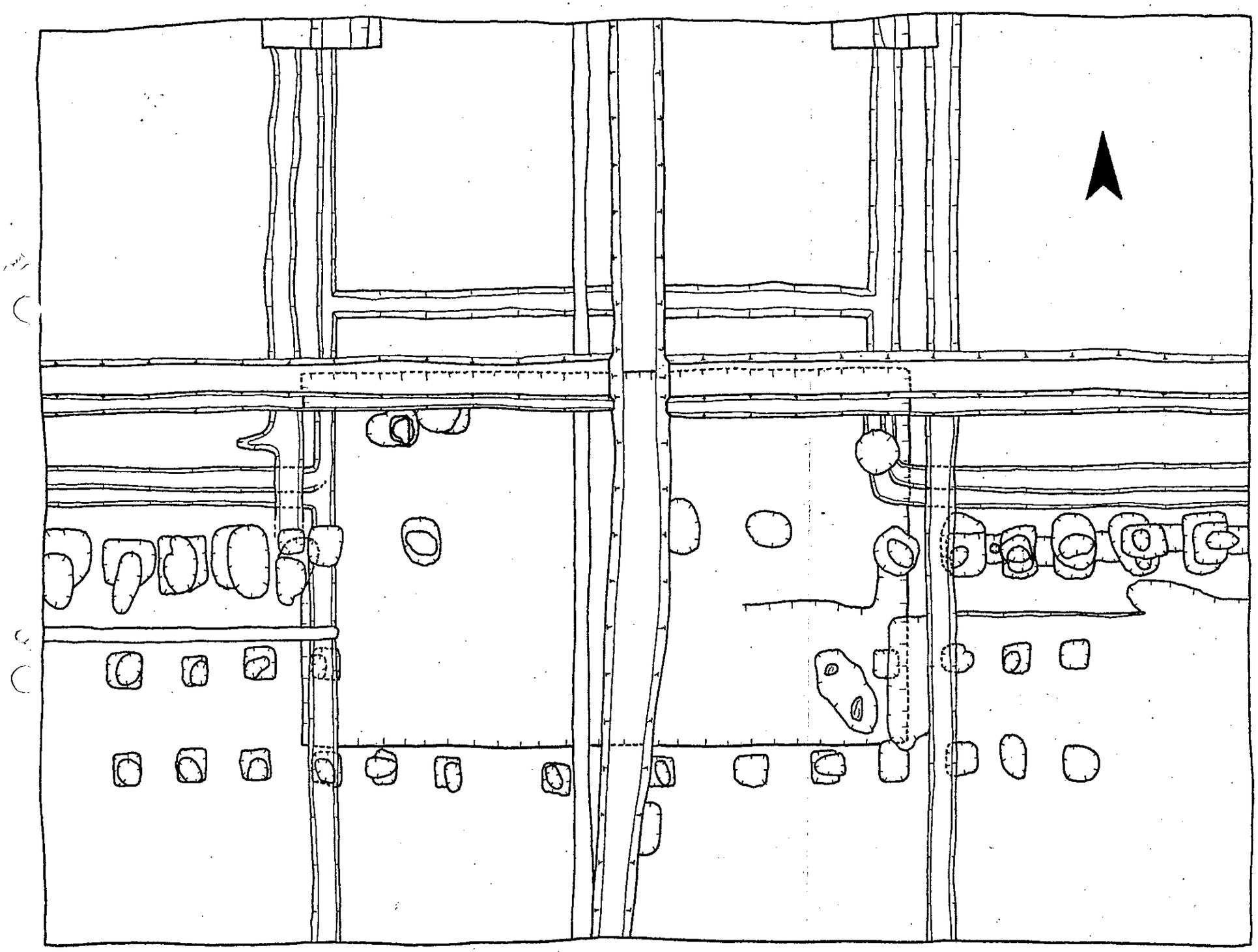
今回の調査で第1次朝堂院の南門を確認することができ、朝堂院の範囲が確定した。朝堂院は南北約285ｍ、東西約215ｍである。南門の規模は推定で東西5間、南北2間、15尺等間に復元できる。これは朱雀門よりやや小さいが、朝堂院の北を限る門（ＳＢ7801）とほぼ同規模である。ＳＢ10は奈良時代中頃には廃絶し、その後ＳＢ13が建てられる。このＳＢ13の規模は、ＳＢ7801が廃絶した後にその北約50ｍのところに建てられる門ＳＢ7750と同等の規模を持つものであり、今後第1次朝堂院地区の変遷を考えるうえで貴重な成果をあげつつある。



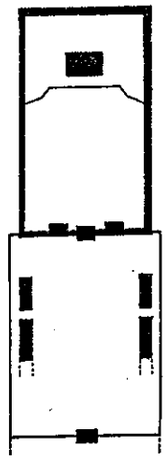


（単位は尺）

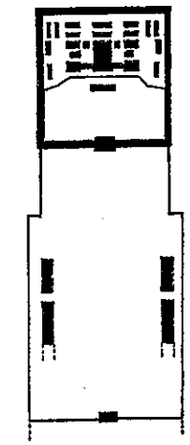
（平安宮は「大内裏図考証」による）



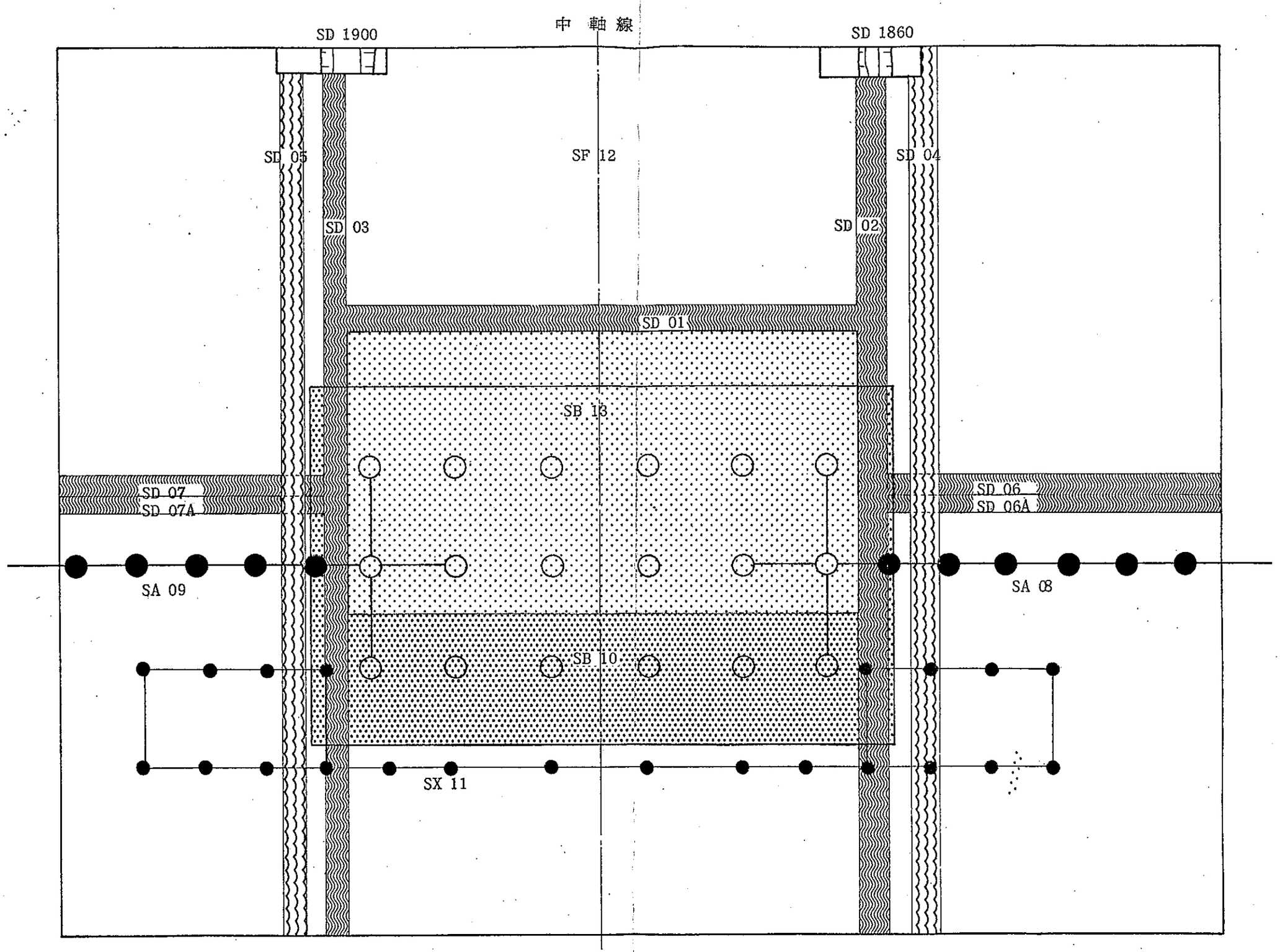
A 期



B 期



S 1: 200


中 軸 線
SD 1900
SD 1860
SD 05
SF 12
SD 04
SD 03
SD 02
SD 01
SB 13
SD 07
SD 07A
SD 06
SD 06A
SA 09
SA 08
SB 10
SX 11